
神様の絵の具

蔡鶯娟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の絵の具

【Zコード】

Z8097Z

【作者名】

蔡鷺娟

【あらすじ】

交通事故で恋人を失った高校生のアキ。悲しみにくれる彼女を見守る家族。ある朝、アキの目の前に翼を持った天使が現れた。それは、失った恋人と同じ姿をしていて……。

どうしようもないことや、逃げられない運命があつて、それでも心だけは自由だと、想うことだけは自由でありたいと、そう願つて創作しました。震災の後で不愉快に思われる方もいらっしゃるかもしれません。でも、想いが伝わればと願つております。

青年は空の中に立っていた。

それはちょうど、透明なガラスの板の上から、地上を見下ろしているような感覚。

けれども東京タワーの展望台もこんなに高くなかったし、と青年はやと隼人は内心でごちる。足元もそうだが周りに一切掴まるものもないことが、より一層の恐怖をあおつて無意識に体が震えた。

茶色がかつた短い髪を風に躍らせた隼人は、確かに立っていると、いうのに足元には何もないという不安感にやつとの思いで慣れ、この状況を作り出した隣に立つ小さな老人を横目で見た。

隼人の腰ぐらいまでの身長しかない、小柄な老人は、ふさふさの白髪と膝近くまで伸びた白いふわふわな髪がご自慢のようだ。絵本の世界から飛び出してきた小人のような様相であるが、笑い方が独特で、歯をむき出しにして「しつしつし」と笑う。だがどんな顔をしても可愛らしい部類に入ってしまう、そういう得なタイプだ。先ほど聞いたところによると、雲を司る神様なのだといつ。

「」の小さな神様と対面してから十分も経っていない。ものすごく氣さくに声を掛けられ挨拶し、気がついたらこの見渡す限り遮るものない空の上にいた。もし高所恐怖症だつたら今頃気絶していただろうな、と隼人は全くどうでもいいことを考えため息をつく。この世界に来てから今までの常識やらなにやらは全く通用しないことを痛感していたため、この突飛な状況を受け入れられるだけの余裕

はあった。当の老人は先ほどから懐を探り、何かを探しているようだ。

小さな空間をどれだけ整理できていないのか、しばらぐじいじをしていたが、ようやく何か缶のようなものを引っ張り出した。自慢げに、につ、と笑って見せてくれたその缶の中に入っていたのは、無色透明の液体。銀色の缶の底が見えるほどに透明であるが、水のようにさらりとはしておらず、とろつとしているようだ。

老人はにやりと笑って「これは特殊な絵の具なのじや」と言った。絵の具だ、と言わても、隼人の記憶ではこんな色の絵の具を使つた覚えはない。透明ではただ紙が濡れるだけだと首を傾げる。

にやにやと笑つたままで、老人はおもむろに缶の中に指を入れ、その絵の具をすくつた。皺だらけの指に光るその液体は、透明な蜂蜜のようになるとろりと滴つた。

一体それで何をするのだろう、と隼人が考えていると、老人は絵の具をつけたその指を、目の前の空に向かつて横一文字に難いだ。すると。

青い青い空の中に突如現れた白い雲。

それは老人の指が走るほうへ緩やかに伸びていく。隼人が声もなく目を瞬かせているのをちらりと見た老人は、楽しそうに笑いながら更に絵の具を指に乗せ、青を埋め尽くすように真っ白な雲を連ねていく。

先ほどまで雲ひとつない、文句のない快晴だつたはずの空に、今ひとつ、またひとつ生まれていく雲。隼人は無言のまま、老人を見つめた。雲を司る神なのだと、そういった老人を。

「しつしつし」

しわしわの顔にさらにしわを寄せて老人は笑った。体の揺れにあわせて、『」白慢の白い髭もふわふわと揺れる。

隼人は、もう一度雲に目をやつた。

青空にまっすぐに伸びた白いライン。強い風に流されてその姿を徐々に変化させ、そして緩やかに空に溶けていく。

隼人は思わずため息をついた。

ああ、こんなふうに

こんなふうに雲を描くところを見せてあげられたらなあ

「行くか？ 見せに」

老人は、透明なその絵の具に濡れた指を動かしながら言つた。目線は雲の方に投げられているが、間違いなく自分に向けて発せられた言葉に、隼人は瞬いた。

「え？ はい？」

まるで心を読まれたように向けられた突拍子もない言葉に正真理解が追いつかず、聞き返してしまつ。

「行つてもいいぞ。おぬしが見せたい者のところへ。わしが許す」

そつけなくも優しい言葉に、隼人は瞳を瞬かせた。許す、とそんな言葉ひとつで行き来できるような世界ではない。それぐらいは隼人にも十分分かつていた。隼人が、隼人として存在していられるだけでも驚きで、幸せなことだと思っているのにまさか会いに行つてもいいだなんてどんな奇跡だろうか。ああ、でも。

目の前にいるこの小さな老人が“神”ならば。そんな奇跡も奇跡ではないのかも知れない。

隼人は見上げてくるキラキラした視線を受け止め微笑んだ。そして大きく息を吸つて吐き出す。戸惑いを、打ち消すように。

会いにいける。きみに。

ただそれだけの想いを胸に、隼人は目を輝かせた。

「よろしくお願ひします！」

「ではその前に修行じやー。描けんことには見せられんぞー」

勢い良くお辞儀をして宣言した隼人に対し、非常に暢気な調子で語尾を延ばして言った老人のその口調に、隼人は思わずくすりと笑つた。この羊のようなもこもこ老人、見た目以上にかわゆい。

「はい、頑張ります！」

若者らしい元気のよい返事に、小さな老人は元々細い目をさらに細めた。

序（後書き）

お話の骨格は数年前から、そしてお話の全体の流れが決まったのも3月11日の震災の前でした。人の生き死にを扱う題材で、正直戸惑いもありました。でもこんなファンタジーがあつてもいいのではないかと私は思います。少し長くなりますが、最後までどうぞ付き合いください。

いない。キミが。
どこにも、どこにも。

どうして、なの？

「アキ、ご飯できたよ」

縁側に座り込み、ぼーっと庭を眺めていたアキに、長兄のハルが声をかけた。

夏真っ盛りの八月、夕方の庭には大輪の向日葵がまるで黄色い壁のように一面に咲き誇っている。さわさわと大きな緑の葉を風に揺らし、その存在を声高に主張する。

ちょうど縁側が陰になるように造られた棚に、キウイと葡萄が旺盛につるを伸ばし、その大きな葉を元気よく広げる。緑のカーテンに遮られた太陽の光は、夕方のもあつてだいぶ柔らかい。

鮮やかな水色のワンピースを纏い、ウェーブのかかつた黒髪を背中に流したアキは、蝉の耳障りな鳴き声すら相殺する静かさを周囲に放ち、まるで一幅の画のようになっていた。

大学生である長男のハルは、学生の特権である夏休みをフルに利用して、今一番の心配の種であるただひとりの妹、アキにかかりつきりであった。体力を生かしたアルバイトに精を出しつつ、やらなくてはならない課題を適当に片付け、空いた時間のすべてでアキの世話を焼く。健康で体力が有り余るほどでよかつたと、今ほど感じたことはない。時間は買いたいほどに欲しいが、全ては大切な妹のため。

だが当のアキは、呼びかけられたことにさえ気付かぬ様子で、微動だにしない。呼吸しているのかすら疑わしいほど、風景に溶け込んだ無機質な姿。目線の先にあるのに、咲き誇る向日葵の鮮やかな黄色さえ映さない暗いアキの瞳に、ハルはその広い肩を落とし、小さくため息をついた。

「アキ、ご飯だよ」

今度は肩にそっと手をやつて呼びかける。アキはびくりと体を震わせはつと弾かれる様に顔を上げ、ハルを見た。そして瞬時に花の様な笑顔で笑った。

「わ、ハル兄、びっくりした。呼んでくれれば行つたのに」

明らかに驚いたのにそれを必死で誤魔化すアキの様子に、ハルは痛々しさを感じその頭を撫でた。

「呼んだよ。大声でな。……ほら、行くよ」

「はーい」

アキは元気に返事をしてすぐに立ち上がった。しかしその瞬間にふらりとよろめいた。慌ててすぐ傍にいたハルにしがみついて、バツが悪そうに微笑んで言つ。

「ずっと座つてたからかなあ？　はは。……今日の夕飯なあに？」

アキの足元がふらついたのを見逃さなかつたハルは咄嗟にアキの身体を支えた。最近はいつもこつだつたから、立ちくらみを想定していつも注意を欠かさない。ハルはやっぱり今日も、と思って一瞬険しい表情をしたが、すぐに笑顔に戻つて言つた。

「ナツ特製の天ぷらにそつめんだ。今日みたいな暑い日には最適だろ？」

その言葉にアキはにっこり微笑んだ。

「うん、そうだね。早く行こうつー」

「……アキ」

「ん？　何、ハル兄？」

自分の腕から空氣のようにするりと抜け出して、ひとりで歩き出したアキの背に、ハルは思わず呼びかけた。一瞬迷つたような表情の後で、ハルは短く刈つた頭を搔いて笑つた。

「いんや、何でもない。さ、飯だ飯だ！」

アキの背中に手を添えてそっと促し、家族の待つ居間に向かった。

日向家では、家事は分担制である。掃除、洗濯、食事……。全てをハル、ナツ、アキ、フコの四人兄弟と、父親である栄の五人で分担して行なっている。

今日の食事当番は次男のナツで、後片付けは長男のハルの担当であつた。

次男のナツはアキと双子として生を受けた高校一年生で、地元の男子校へ通っている。今はやはり夏休み中で、時間を作つては短期アルバイトに勤しむ勤労学生だ。

家族そろつて囮んだ夕食の後で、がちゃがちゃと音を立てて皿を洗うハルの元へ、ナツは少し長めに伸ばした明るめの髪をゴムで縛りながら近づいた。

「アキは、大丈夫なのか？ 今晚もあんま食べてなかつたし……。栄養失調になつたりはしないだろ？ な……」

抑え目の声で心配そうにハルに向かつて問うたナツは、泡だらけになつた皿を水で流すべく、水道の蛇口をひねる。ナツは普段から多くの家事をこなしている為、本来ハルの当番を手伝つたりはしない。だがわざわざ自分の隣にやつてきた理由をわかっているハルは、何故手伝うのかなどとは聞かず、スポンジを動かしながらナツの質問に答えた。

「栄養は……なんとか足りている……と思う。野菜ジュースやらサプリやらで……。だが絶対的にカロリーが足りてない。大分痩せた。

わつをも立ちくらみを起こしたみたいだ」「

『ぱぱぱぱ』と放出した水を惜しげもなく使って泡を流していくナツは、重苦しいため息をついた。顔を下げる拍子に落ちてきた前髪を邪魔そうに首を振つて払う。その間も顰めた眉は額の中心で細かい縦皺を刻んでいて、不満と悲しみが同居しているような表情だった。

「もう一ヶ月だぞ……。どうしたらいいんだ？　俺たち兄弟じゃ、アキの心は癒してやれないのかな……」

ナツの独り言のような問いに、ハルも答えを探しあぐねて黙っていた。

考え付く方法は何でも試した。ただアキの為、アキが再び笑ってくれるようにと願い、動き続けてきた。だがアキはその本来の笑顔も、瞳の輝きも無くしたまま、もうひと月が経ってしまった。

「アキのあの顔見るとた、俺、いつそ泣いていいよって抱きしめてやりたくなるんだよな……」

うめく様に言つたナツに、ハルも同意を示した。

「ああ、そうだな……。少しでも気持ちを吐き出してくれれば……」

泡だらけのスポンジを握り締めて、それつきり沈黙してしまったハルの隣で、ナツは呟く。

「……馬鹿やー、隼人……」

『本当は、お前の仕事だろ？』と続けて小さく呟かれた言葉を、ハルは聞こえない振りするしかできなかつた。

重苦しい空気が立ち込める、男ふたりが皿洗いをする台所の隣。障子を挟んで居間では末っ子のフコと父の栄さかえがテレビを見ていた。ゴールデンタイムのバラエティで、画面の中ではたくさん的人が賑やかにおしゃべりしている。

大人しくテレビを見ているのかと思いきや、身体だけテレビの方に向に向けて実は、逞しい長兄と細身の次兄のふたつの背中を静かに見つめていたフコは、瞬きをひとつして、音を立てずに立ち上がった。

軽快な足音で去っていく末の息子を、同じく居間にいた父、栄は無言で見送った。テーブルに肩肘をつき、フコと同じように身体はテレビの方向に向けたまま、栄はちらりと居間の隅にある仏壇に目をやつて、そしてまたテレビに目線を戻した。……画面の中で笑い転げる人々を、見つめるその目は冷めている。焦点もあつていない。

音は、テレビから聞こえる意味のない響きだけ。

家族が賑やかに喋り、明るく楽しかった日向家の面影は、今は、ない。

風呂から上がったアキは、自室のベッドに腰掛け、電気もつけな

いままでの暗がりで、何をするでもなく座っていた。最近はこつこつベッドに座り、いつのまにか意識が途切れて眠るのを待っている。別の場所にいて眠ってしまえば、家族に迷惑がかかることを学んだのだ。

ソニー一週間ほど夢遊病になつたかのよつて、変な場所で目覚めることが多く、縁側で座つたままだつたり、玄関の外で意識を取り戻したこともあつた。一度はすっかり水に戻つた風呂の中で目覚め、朝起きてきてそこに居合わせたナツが、真つ青になつて叫び、大騒ぎになつてしまつた。それ以来、こうしてベッドの上にいれば、いつも眠つてしまつても目覚めたときはベッドの上であり、家族に要らぬ心配を掛けなくてすむ、とアキは思つていた。体が睡眠を求めるギリギリまで目を開けていて、気がついた時には眠つていた、というのが一番楽なのだ。無理矢理寝ようとしても、睡魔は襲つてこない。

ふと、見つめられてくる気がして顔を上げると、ドアのところに弟のフコが立つてこちらを伺つていた。フコは日向家の三男で末っ子、今年十一歳の小学校五年生だ。ナツと同じ少し明るめの、くるくるした髪に、母親譲りのくりつとした大きな瞳。まるで天使のような容貌は、ご近所のおばちゃんたちのアイドルと化している。アキは少し首を傾げ、そしてフコに向かつて手招きをした。

「どしたの？ フコ。入つておいで？」

その言葉に、フコはとにかく近づいてきて、アキの座るベッドの端にちゅうじんと腰掛けた。

「アキちゃん、ぼくね……」

フユは言い出すなりそれつきり口ごもつてしまい、もじもじしている。ものすごく可愛いが、それでは一体何が言いたいのか全くわからない。フユの柔らかな髪を撫でながら、アキは先を促した。

「フユ? どうしたの? 何か言いたいことがあるんでしょ? 言つて『ほらん?』」

「う、うん……。あのね、ぼく……ね。……このあいだ、隼人兄ちゃんを見たんだよ。アキちゃんが座ってるえんがわのね、ひまわりの前に立つてね、アキちゃんのこと見てたの」

まだ幼い弟がもじもじと言つた突拍子のない発言に、アキは目をみはる。言い難そうにしていた理由が分かつた。幼くたつてフユには分かっているのか。アキの顔が一気に歪む。

「……フユ。隼人兄ちゃんはもついないんだよ? 一緒に見送ったでしょ?」

動搖して声が震えるのが分かる。フユの頭を撫でていた手も、油の切れたからくり人形のように、ぎこちなく彷徨う。だがフユはアキの動搖に気付かずに、むしろ嬉しそうに話出した。

「うん、アキちゃん言つてたよね。隼人兄ちゃんは、ママみたいに天国へ行つたんでしょ? ママもね、時々会いに来てくれるんだよ。夢でね、会つたんだ」

フユの何の氣ない言葉と無邪氣さがアキに激しい衝撃と動搖を与える。胸が苦しくて、思わず「ひゅっ」と息を飲み込んだ。

……本当にそなうらしい。幽靈だつて夢だつてなんだつていい。

もつ一度会えるなら。

「……だけどももつ会えない。もつこんなにも純粋な子供じゃない。分かっている。……十分すぎるほど、分かっているのだ。

イライラが、言葉に棘を生やす。

「フコ、お姉ちゃんそういう冗談はキライよ。天国へ行つた人には会えないの。……死んじつた人には、一度と会えないんだよ」

自分の言葉に余計に傷ついて、胸がズキンと痛んだ。皿の淵に溢れようとする涙を堪えるのに、のどが痛む。

上からポツリポツリと屋根に当たる雨の音が聞こえてきた。大粒の雨音。

いつもはやさしい姉が初めて見せる荒げた声と突き放すような態度に、フコはびっくりと体を揺らし、アキから離れるように身を縮めた。

「…………アキちゃん、『』、『』めんね……。ぼ、ぼく……」

弟の大きな瞳から涙が溢れるのを見て、アキははつとした。慌ててフコを慰めるも、甘やかして育ててしまつたのか、末っ子の彼は昔から一度泣き出すとなかなか泣き止まない。

泣く少年と運動するかのように、降り出した雨はスコールのようになに一気に本降りになり、屋根を叩く。

「フコ、『』めんね、フコは悪くな『』よ。お姉ちゃんが悪いんだよ、『』めんね……」

子供特有の少し高めの体温を感じながら、アキはその柔らかい体を抱きしめる。ざあざあと振り続ける雨の音に紛れながらひつゝ、

としゃくつあげる小さな体をさすり、「ごめんねを繰り返す。

心に、穴が開いている。

こんな風に、フユを怖がらせて泣かせたことなんてなかつた。それ以上に、泣いているフコを見ても、動かない心。

ブラックホールのようにぽつかりと胸に開いた穴は、深く黒い闇の中での、何もかもを噛み砕き、飲み込み、沈ませ、全ての感覚を麻痺させる。痛みだけが、チクチクと刺すような、ジクジクと滲むような痛みだけが、執拗にアキを責め立てる。まだ、生きているのだと、体の存在を声高に主張する。

隼人

動くべき脳の大半はただひとつのみ念に取り付かれるように停止している。

隼人

フユの柔らかな髪を撫でつつ、くちびるは想いのこもらない「ごめんね」を呟き続ける。さきほどは堪えられたはずの涙が、ぼろりと頬を伝つていく。

隼人

どうして

死んでしまったの？

薄れしていく意識の片隅に、耳障りな雨音がずっと響いていた。

雨はキライ。

君とさせよならした日のことを見
思い出してしまうから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8097z/>

神様の絵の具

2011年12月25日21時54分発行